

7月の住職のひとこと



新盆7日法要

8月1日～7日毎朝5時から
一般の檀信徒の方々も、志
ざす霊位のご回向をお申
込みいただけます

誰でもが『人生の四季』（青春・^{しゅか}朱夏・^{はくしゅう}白秋・^{げんとう}玄冬）のいずれかを《今》生きている。季節の四季は何度でも巡ってくるが、人生の四季は、いつであっても**たった1回限り**…青春は30歳頃まで、朱夏は30～50歳ぐらい、一番の働き盛りであろうか。白秋は50～70歳頃まで、そして玄冬はそれ以後。

H15年7月、師父亡き後、寺門・幼稚園運営共に朱夏を経て白秋の半ばを過ぎた今日、その来し方を振り返ってみると、^{ちよつもうしん}猪突猛進の連続であった。『なかば来て 高根ながめの ^{ひとやす}一休み』心模様を変えていかねば…その想い、実に大である。

季節の四季は巡り、今年も**〈お盆〉**が間もなくおとずれる。年中行事の中でも特に日本人が昔から大切にしてきたこの行事が、核家族の中で、今や見失われつつあることは、寂しさを通り越して憤りすらおぼえる。追い討ちをかけて、一向に収束を見ぬまま第7波に突入したコロナ禍は、私達の心を^{むしば}蝕み、激変させてしまったのではないだろうか。

自らが体験したことのない**《死》**というものを、祖父母・両親・伴侶・子供等、身近な存在、掛け替えのない存在を失うことで、その悲しみ・苦しみの現実を直視し、生きているとは、死ぬ命をかかえていること、そして、確実にその日が近づいてくることを、先人は身を賭して学んできたはずである。

恵まれた毎日を送っていると、それが当たり前、感情的マンネリがいつしか人としての**《命の尊厳》**を凝視する^{まなざ}眼差しを^{おお}覆い隠してしまい、二度とない人生・二度とない今日・^{こんにち}只今を^{ただいま}限りなく見落とし続けてきたのが、経済大国日本の大きな落とし穴であったといえよう。出会うということは、心と心、命と命がふれあうこと、顔と顔との〈であい〉は何とお粗末なことか！ 私達の日常に**〈であい〉**を取り戻し、真剣に**〈であい〉**の道を切り開いていこうではありませんか…コロナ禍の中でこそ、**〈お盆〉**を向かえる心…『**これでいいのか**』は『**このままではいけない**』ということ。

9月の住職のひとこと



8月お盆中 早朝の本堂の全景

師父が他界して20年、振り返ってみれば時の流れは一瞬であった。今日までこんにち貫いたものは、〈必死〉の一語に尽きる・・・無我夢中であった。

当時、宗教法人格であった幼稚園、そのままであったら今はもう存在しないだろう。一転、目を寺門運営へと向ければ、普請・再建の連続であった。

「**一生不悟**」・・・詩人 相田みつを氏の言葉である。一生悟らず、悟ったと慢心した時、成長は止まる・・・人は生涯にわたっての修養を忘れてはなるまい。

しかし、人はそれほど強いものではない。気力が萎えてしまう日もある、また苦しいこと淋しいことに胸ふさがれる日が続くこともある。その時、どういう言葉を口ずさんでいるか・・・それが、その人の運命を左右することも必ずあるはず。

〈**投げられた** ところで**起きる** **小法師かな**〉小法師とは、こぼし達磨だるまのこと。達磨は、いついかなる所へ放り出されても、文句1つ言わず、そこを正念場としてコロッと起り上がる。処世の道の要諦であろう。

秋の彼岸月、其れ其れそぞに人生を潤す言葉を考えてみてはいかがであろうか。

10月の住職のひとこと



おえしき 御会式 日蓮大聖人御命日の報恩法要

努力というのは、多かれ少なかれ誰でもしますが、しかし、努力が、**執念（深く思い、決して諦めたり、忘れたりしない。）**と呼べるものにまで高める・・・
ということは、至難の^{わざ}業。《我れ日本の柱とならむ、我れ日本の^{がんもく}眼目とならむ、
我れ日本の^{たいせん}大船とならむ、等とちかいし^{がん}願、やぶるべからずー開目鈔ー》宗祖
日蓮大聖人の執念ともよべる誓願である。

1人の人間として、大聖人を想う時、「**人生を拓く・道を拓く**」・・・典型的人物像が、そこからは浮かび上がってくる。

現代に、こうゆう逸話が残っている・・・その青年は、地方の大学を卒業し京都のある会社に就職した。就職難の時代・・・その青年の喜びは、実に大きかった。・・・しかし、その喜びが色あせるのに、さして時間はかからなかった。何故ならば、その会社は赤字続き、給料が遅配されることも^{たびたび}度々。・・・これに対して労働組合は頻繁にストを繰り返す。その青年は、会社にウンザリ、同期の友人と相談し、自衛隊に入ることと決定し、実家の長兄へ戸籍抄本を送ってくれるように頼む。・・・すると、長兄よりの手紙「働くところもなく、おまえを雇ってくれた会社に何の恩返しもせずに辞めるとは何事か！・・・」長兄の叱責がこたえた彼は、生活も考え方も一変させる。「よし！この会社という場こそ最高の場所と思おう。」・・・彼は、その会社に布団から炊事道具まで持ち込み、寝る間も惜しんで、仕事に没頭・努力をした、それこそ**努力から執念と呼べるものに変える**んです。・・・こうして開発された製品に、ある大手メーカー

が着目、大量の注問が舞い込む様になる。しかし、そんな時期、労働組合は、賃上げを要求して全面ストに突入。その青年の行為は、全組合員から非難・罵倒の連続・・・しかし、その青年は彼らに一步も譲らない「私は会社の回し者でもなければ、みなさんも敵でもない！よく考えてみて下さいヨ・・・会社で唯一黒字を出しているのは、私の**執念**で作りに上げた製品だけじゃないですか・・・この生産をやめたら、それこそ、みなさんの給料も払えなくなるんじゃないですか？」その青年の態度に組合幹部は、心を動かして、スト中も仕事の続行を黙認。・・・本年8月30日、他界された京セラ創業者〈平成の経営の神様〉稲盛和夫氏、25歳の頃の話である。

努力が執念に変わった時、事は大成する。・・・私達の法華經受持の姿も是非とも、こうでなければならぬ。稲盛氏言く「成功者と不成功者の差は、紙一重。・・・その紙一重とは何か？・・・不成功者には、**ネバリ**がないんです。」

松下幸之助氏も、こうゆう事を言っている「失敗はありますヨ。でも、成功するまで**続けたら**、失敗はない！・・・成功とは成功するまで、**続けること**です。」・・・

継続は、力である。・・・受持することです。宗祖日蓮大聖人言く「**受けるは易く、持つは難し。さるあいだ成仏は持つにあり**」・・・人生・道を拓く鍵でしょう。・・・本年第741 ^{おんき}遠忌、^{おえしき}御会式には宗祖を偲び、その御姿に学ぶ原動力は、正に《**受持**》に徹する心掛けです。・・・心構えというのは、どんなに磨いても毎日ゼロになる能力である。毎朝、歯を磨くように心構えも、毎朝磨き直さねばならない・・・朝の**勤行**の大切さです。稲盛氏日く「**新しき計画の成就是、只 ^{ふくつふとう}不屈不撓の一心にあり。さらば、ひたむきに ^{おも}只想え。気高く、強く、一筋に。**」**巨星墮つる**・・・その悲しみは、ひとしお・・・偉大な**道を拓いた**、その想いに、心耳を澄ませたい。

お互い様に《**発憤力**》こそ、仏道を拓く源であることを肝に銘じたい。